

作業療法士の知名度に関する調査 ～山形県の場合～

境 信 哉*・村井 真由美*・竹原 敦*・中村 正三*

A Questionnaire Study on the Publicity of Occupational Therapist in Yamagata Prefecture

Shinya SAKAI, Mayumi MURAI, Shun TAKEHARA, Shozo NAKAMURA.

Abstract : In order to know how occupational therapist (OT) is well-known in the medical and welfare worker, we performed a questionnaire study for the people in Yamagata and its ne-ighborhood prefectures.

The questionnaire consists of four questions; ① whether or not you know each in 22 kinds of medical and welfare workers, ② whether or not you know a word of rehabilitation, ③ whether or not you have undergone a rehabilitation service, ④ selections of how you have known OT among 17 items.

In the present study, we collected the total number of 753, and analyzed in 553 from people lived in Yamagata prefecture.

The publicity of OT were 48%, while 100% in medical doctor, 99% in nurse, 91% in public health nurse, 59% in physical therapist (PT), 63% in social worker. People known a word of rehabilitation were 543/553 (98%).

On a way to have known OT, TV was most common in 118/268 (48%), secondly "knew at a hospital" and "heard from medical worker" was in 62/268 (23%).

To enhance the publicity of OT, it is suggested that we need to hold the information activities in the face and by the mass media for people in Yamagata prefecture.

Key words : occupational therapy, publicity, questionnaire study.

はじめに

我が国の作業療法が始まって30年余りが過ぎ、平成9年7月1日現在作業療法士の有資格者数は9,809人となった。特に過去6年間では約4,500名の作業療法士が誕生し顕著な増加を示している。今後こうした増加が続くと平成14年にはその倍の19,181人、平成20年には32,033人と予測されている¹⁾。

一方、作業療法士数の急増とともに、その活躍する場も拡大すると思われるが、作業療法あるい

は作業療法士の職業が一般市民に理解されているかどうかを知ることは、我々の自己評価に必要な問題点および課題を提供するとともに、今後の我々の活動にも多くの示唆を与えてくれるものと思われる。

そこで今回、我々は医療・福祉職の中における作業療法士の知名度に関するアンケート調査を行い、集計結果を分析したので報告する。

方 法

本学の学生20名により、夏期休暇期間中に自宅周辺および帰省先にてアンケート調査が行われた。学生1人当たり約50名の一般市民を対象にし、直接記述法にて実施した。アンケートを実施した都

* 山形県立保健医療短期大学作業療法学科
Department of Occupational Therapy, Yamagata School of
Health Science, 260 Kamiyanagi, Yamagata, 990-2212, JAPAN

Table 1 アンケート調査項目

年齢・性別・職業・住所(都道府県名と市町村名)
① 22項目の医療・福祉職の中から名前を知るもの選択(複数回答可)
② 「リハビリテーション」ということばについて知っているかの有無
③ リハビリテーションを受けたことがあるかの有無
④ ①で作業療法士を知っていると答えた者のなかから、その知り得た方法について17項目の中から選択

道府県(括弧内は調査に当たった学生数を示す)は、山形県(12人)、北海道(3人)、新潟県(1人)、福島県(1人)、千葉県(1人)、群馬県(1人)、石川県(1人)であった。調査内容はTable1に示すように①22項目の医療・福祉職の中から名前を知るものを選択、②「リハビリテーション」という言葉について知っているかの有無、③リハビリテーションを受けたことがあるかの有無、④①で作業療法士を知っていると答えたものの中から、その知り得た方法について17項目の中から選択、であった。アンケート調査を実施した場所は、対象の選定に偏りが生じないようにするために、駅前などの不特定多数が集まる場所を選んだ。

結 果

集計されたアンケート件数は、回答者の現住所から都道府県別に分類すると、山形県553件、北海道163件、新潟県56件、福島県54件、千葉県54件、群馬県41件、石川県40件、その他86件、総計1047件であった。

これらの集計結果から、今回は山形県の553件を分析した。男性は239名、女性314名で、年齢構成は、12歳から85歳までで、平均年齢は37±17歳であった。山形県の地域別では、村山304件、庄内88件、置賜99件、最上60件であった。

(1) 山形県における医療・福祉職の知名度 (Fig.1)

回答者のうち「(医療・福祉職名)を知っている」と答えたものを百分率で表した。その結果、医師553/553(100%)、看護婦546/553(99%)、薬剤師525/553(95%)、栄養士519/553(94%)、助産婦516/553(93%)、保健婦501/553(91%)、

ヘルパー496/553(90%)は高知名度であり、次いで、救急救命士446/553(81%)、按摩マッサージ指圧師430/553(78%)、診療放射線技師356/550(64%)、ソーシャルワーカー(SW)かケースワーカー(CW)349/553(63%)、介護福祉士341/553(62%)、理学療法士(PT)328/553(59%)、臨床検査技師298/553(54%)、社会福祉士290/553(52%)で、半数以下は作業療法士(OT)268/553(48%)、柔道整復師231/553(42%)、言語療法士(ST)215/553(39%)、衛生検査技師196/553(35%)、義肢装具士193/553(35%)、視能訓練士109/553(20%)、臨床工学技師69/553(12%)であった。

(2) リハビリテーションを知っているか

山形県の553人中543人(98%)が知っていると答えた。

(3) リハビリテーションを受けたことがあるか

553人中64人(12%)が受けたことがあると答え、これらの平均年齢は39.6±19.7歳であった。

(4) (1)の質問で作業療法士を知っていると答えた中で

553名中268名(48%)を対象にして、以下の分析を行なった。

a: 山形県における作業療法士の知名度(年齢層別)(Fig.2)

作業療法士の知名度を年齢層別に示した。知名度が高い年齢層から順に表すと、20歳代54/97(56%)、40歳代68/131(52%)、10歳代65/129(50%)、60歳代18/40(45%)、30歳代33/78(42%)、70・80歳代10/25(40%)、50歳代20/53(38%)であった。

b: 作業療法士を知った方法 (Fig.3)

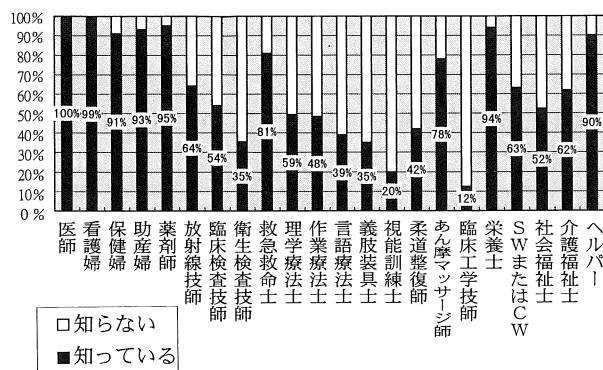


Fig. 1 山形県における医療・福祉職の知名度 (n=553)

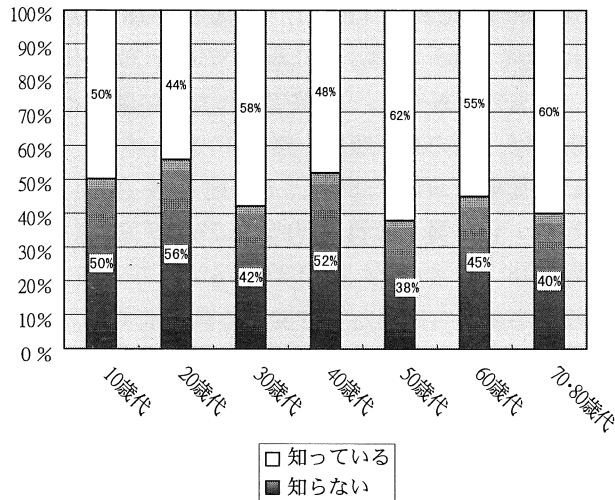


Fig. 2 山形県における作業療法士の知名度 (年齢層別, n=553)

「テレビ」が最も高く 118/268 (44%), 次いで「病院で知った」と「医療関係者から聞いた」が同数の 62/268 (23%), 「知人から聞いた」57/268 (21%), 「雑誌」54/268 (20%), 「学校で知った」49/268 (18%), 「職場で知った」42/268 (16%), 「家族から聞いた」41/268 (15%), 「書籍」38/268 (14%), 10%以下は「パンフレット」27/268 (10%), 「親戚から聞いた」25/268 (9%), 「講習会」12/268 (4%), 「ポスター」11/268 (4%), 「その他」5/268 (2%), 「インターネット」2/268 (1%), 「パソコン」2/268 (1%) であった。

c: 作業療法士を知っていると答えたなかでの「テレビ」の占める割合 (年齢層別) (Fig.4)

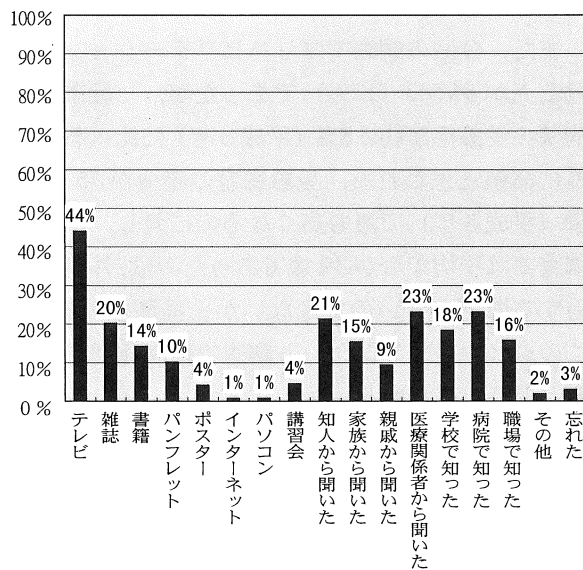


Fig. 3 作業療法士を知った方法の割合 (複数回答, n=268)

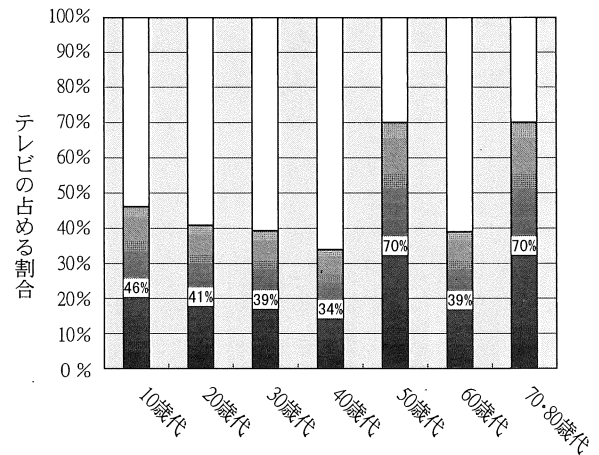


Fig. 4 作業療法士を知っていると答えた中でのテレビの占める割合 (年齢別, n=268)

作業療法士を知った方法の中で「テレビ」が非常に高い値を示していた (Fig.3)。この結果に着目し、年齢層別に表示した。グラフでは50歳代 14/20 と70・80歳代 7/10 で70%と非常に高い値を示した。他は、高い値を示した年齢層から順に示すと、10歳代 30/65 (46%), 20歳代 22/54 (41%), 30歳代 13/33 (41%), 60歳代 7/18 (39%), 40歳代 23/68 (34%) であった。

d: 作業療法士を知っていると答えたなかでの「テレビ」の占める割合 (職業別) (Fig.5)

Fig.4と同様に、「テレビ」の占める割合を職業別に表示した。高い値を示した職業から順に示すと、主婦 12/18 (67%), 無職 12/22 (55%) が高い値を示し、次いで、その他 7/14 (50%), 学生 36/83 (43%), 会社員・公務員・教員・自営業 45/116 (39%), 医療福祉従事者 3/13 (23%) であった。

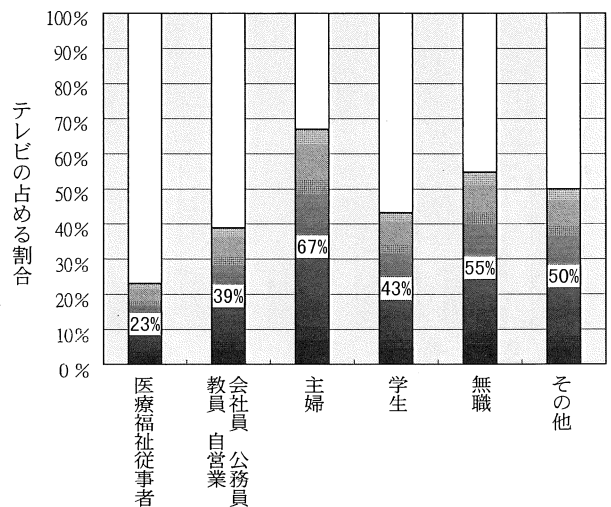


Fig. 5 作業療法士を知っていると答えた中でのテレビの占める割合 (職業別, n=266)

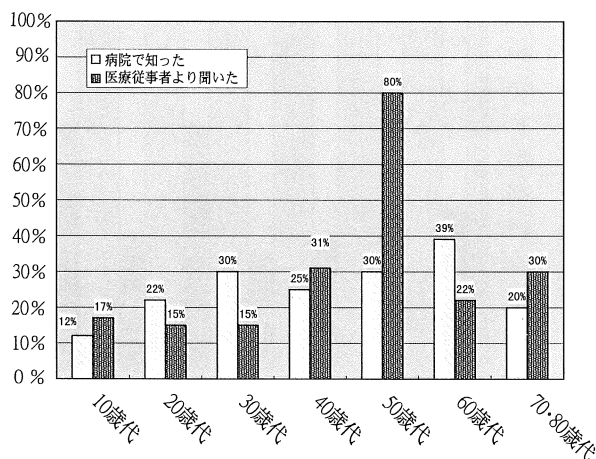


Fig. 6 作業療法士を知っていると答えた中での「病院で知った」「医療従事者より聞いた」の占める割合 (年齢層別, n=268)

e: 作業療法士を知っていると答えた中での「病院で知った」「医療従事者から聞いた」の占める割合 (年齢層別, Fig.6), (職業別, Fig.7)

Fig.3で「テレビ」の次に高い値を示した「病院で知った」「医療従事者から聞いた」に関しても、年齢層別、職業別で表示した。それらの値について高い順に示すと、「病院で知った」に関する年齢層別では、60歳代 7/18 (39%), 30歳代 10/33 と 50歳代 6/20 (30%), 40歳代 17/68 (25%), 20歳代 12/54 (22%), 70・80歳代 2/10 (20%), 10歳代 8/65 (12%), となり、「医療従事者から聞いた」に関する年齢別では、50歳代 16/20 (80%) が非常に高い値を示し、続いて 40歳代 21/68 (31%),

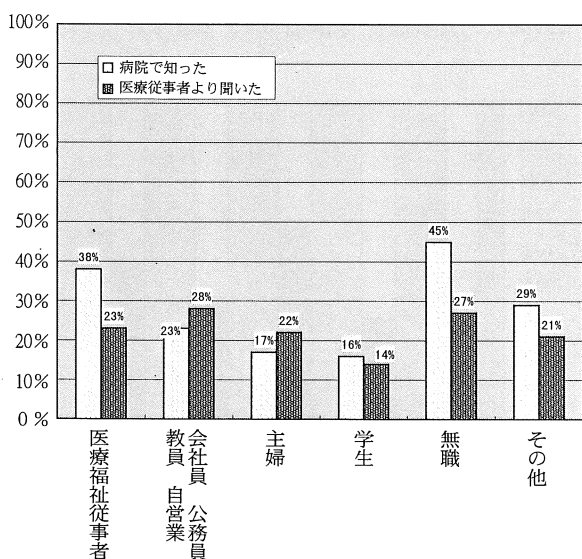


Fig. 7 作業療法士を知っていると答えた中での「病院で知った」「医療従事者より聞いた」の占める割合 (職業別, n=266)

70・80歳代 3/10 (30%), 60歳代 4/18 (22%), 10歳代 11/65 (17%), 20歳代 8/54 と 30歳代 5/33 (15%)であった。「病院で知った」に関する職業別では、値の高い順に、無職 10/22 (45%), 医療福祉従事者 5/13 (38%), その他 4/14 (29%), 会社員・公務員・教員・自営業 27/116 (23%), 主婦 3/18 (17%), 学生 13/83 (16%)であり、「医療従事者から聞いた」に関する職業別では、会社員・公務員・教員・自営業 32/116 (28%), 無職 6/22 (27%), 医療福祉従事者 3/13 (23%), 主婦 4/18 (22%) その他 3/14 (21%), 学生 12/83 (14%)であった。

考 察

1. 調査結果に関する考察

1) 質問①～③に関する考察

ここ数年の間に生まれた比較的新しい職種である社会福祉士や介護福祉士、救命救急士等の方が作業療法士より知名度が高いという結果が得られたが、これらの職種はテレビや新聞等で話題になり、日常頻繁に出現頻度が多かったためと推測される。

一方、リハビリテーションの知名度は98%と著明に高かったのに比し、リハビリテーションに従事する作業療法士のみならず、理学療法士、言語療法士、視能訓練士、柔道整復師などはいずれも半数以下であり、一般市民からは、俗に言う「リハビリテーションの先生」として理解されている可能性がある。

また、今回の調査ではリハビリテーションを受けた人が64/553 (12%)であったが、一般市民の病院の受診率が約5.8% (平成8年)に比べると意外に高値と思われる。受診患者の年令が75～79歳 (平成8年)で最も高くなるのに対し、今回の調査では平均年令が39歳であったのは、外傷に起因する障害が多いのではないかと推測される²⁾。この点は今後のアンケート調査で検討確認する必要があると思われる。

2) 質問④に関する考察

今回の調査では「テレビ」によって作業療法士を知った者が、118/268 (44%) (Fig.3)と高値であったが、これは最近、テレビドラマで作業療法士が登場したり、医療現場を紹介する番組の中で作業療法士が紹介されることも多くなってきたこ

とが考えられる。真木ら³⁾は、学生に対する縦断的なアンケート結果から作業療法士を知った情報源としてマスコミから知った者が最も多かったとを報告している。健康に関する情報収集経路の調査によれば、情報の入手先はテレビが73%、新聞43.6%、ラジオ11.7%とマスコミ関連によるものが圧倒的に多く、常に考慮すべきことは情報の信頼性と正確性である⁴⁾。さらに、このテレビに関して詳細な分析を行った (Fig.4)。作業療法士の知名度に年齢層による大きな差は見られなかったが、50歳代と70・80歳代で70%と高値を示した。

職業別では、主婦67%、無職55%と高値を示した (Fig.5)。この理由を推測すると、一般的に主婦は在宅時間が長いため、情報の多くをテレビに依存しているからと思われる。無職と記入した41人中、65歳以上は28名と老人が多く、主婦と同様な要因が推察される。また、作業療法士を知っていると答えた286名の「病院で知った」「医療従事者から聞いた」は23%であったが、年齢層別では高齢者層が高く、職業別でも「無職」で高値、学生で低値を示した (Fig.6)。「無職」は前述したとおり、老人の占める数が多いということなので、つまり、年齢層別も職業別も同様に年齢の低い者よりも高い者の方が、その占める割合が高いことを意味している。これらの結果の要因は、高年齢層の方が、医療・福祉サービスを受ける機会が多いからではないかと推察される。また、家族・親戚などの付き添いなどの機会に作業療法士を知ること考えられよう。さらに、地域医療・福祉サービスの充実により自宅や施設でも医療・福祉職に接する機会が多いことも考えられる。このように「病院で知った」「医療従事者から聞いた」の項目は、テレビよりも、地域特性を直接反映していると思われる。すなわち、地域における作業療法士数や機能訓練事業、市民を対象にした講演会などの要因が、その地域での知名度に反映すると考えられる。

2. 知名度が反映するもの

知名度調査は、一見無意味なように思われる。それは、仮に知名度が高かったとしてもどのような意義があるのかまでは明白にならないからであ

る。しかし、作業療法士が地域で活躍したり、一般市民から注目されるようになれば、必ずその知名度に跳ね返ってくるはずである。一方、評判の低下も知名度に跳ね返ってくることになる。ただ単に作業療法士が一般に知られているか否かではなくなぜ知っているのか具体的な作業療法士の何を知っているのかといった質的な側面も今後検討が必要となろう。作業療法士を知る機会はいろいろあると思われるが、ある地域での知名度の高さは、先に述べたような要因が反映していることを示唆している。知名度は作業療法士の活躍度のバロメーターと成りうるのである。知名度を高めた要因を詳しく知りたければ、詳細なアンケートを実施する必要がある。

実際、今回の知名度調査だけでは、作業療法士の知名度が果たして高いのか低いのかは不明である。比較するためには縦断的な研究が必要であろう。また、都道府県間や都市間での知名度に差があるかどうか興味深いところである。この点に関して今後の課題となる。

今回の調査ではあくまでも作業療法士の知名度に限定したため、作業療法士の業務内容やイメージ等についての情報は得られていない。今後の調査の参考にしたいと考える。

謝 辞

アンケート調査にご協力いただいた山形県立保健医療短期大学作業療法学科第1期生20名全員に深謝致します。

文 献

- 1) 荻原喜茂: 作業療法士の需給見直しをめぐって. 作業療法 16, 324-328, 1997.
- 2) 厚生省大臣官房統計情報部資料 (平成8年度), 1996.
- 3) 真木誠・山田孝: 作業療法はどのようにみられているか? (4) ~在学生へのアンケートから~ (7年間の変化について). 作業療法 7, 320-321, 1988.
- 4) 厚生省保健福祉動向調査, 1996.
- 1997. 12. 30. 受稿, 1998. 2. 6. 受理 -

要 約

作業療法士が一般市民にどの程度知られているかを知る目的で、山形県を中心に7都道府県で直接記述法によるアンケート調査を実施した。アンケート調査項目は以下の4項目である。①医療・福祉に関連する22職種の中から知っている名称を選択, ②リハビリテーションを知っているか, ③リハビリテーションを受けたことがあるか, ④①で作業療法士を知っていると答えた者で, その名称を知り得た方法について17項目の中から選択, であった。回収されたアンケート件数は773件であったが, 今回は山形県在住の553人から得られたアンケートを分析した。

「医師」および「看護婦」の知名度が約100%に対し, 「作業療法士」は48%, 「理学療法士」は59%であった。リハビリテーションを知っているものは543/553(98%)を占めた。作業療法士の名称を知った方法では「テレビ」が48%と最も多く, 次いで「医療従事者から聞いた」および「病院で知った」が23%であった。

これらの結果から, リハビリテーションの中で作業療法士の存在とその専門性を市民に理解してもらうためには, 作業療法士自身による地域での市民向け活動とメディアを介する活発な活動が必要と考えられた。

キーワード: 作業療法, 知名度, アンケート